

田口祐子 提出 学位申請論文

『現代における人生儀礼の実態と意義

—女性と子どもに関する儀礼を通じて—』 審査要旨

論文内容の要旨

本論文は、現代日本社会において多くの人々の間で行われている人生儀礼—とくに女性と子どもに関する儀礼—の実態調査を実施し、現代における人生儀礼の意味について論じている。筆者が対象とするのは、「安産祈願」「初宮参り」「七五三」「厄年」の四つの儀礼である。「安産祈願」「初宮参り」「七五三」は一般的に産育儀礼に分類され、女性と子どもに関わりの深い儀礼である。「厄年」は、とりわけ三〇代女性の中に意識・関心が高く、三〇代が子育てをしている世代とも合致する点で、他の儀礼同様女性と子どもに関わりの深い儀礼として研究対象となっている。

構成は、初めに「序章」を置き、本論文における問題意識と研究の位置づけについて確認を行っている。以下「第1章 現代における安産祈願の実態と背景」、「第2章 現代における初宮参りの実態と意義」、「第3章 現代における七五三の実態と意義」、「第4章 現代における厄年の実態と厄年観」（付論として「女性誌の中の厄年」が付されている）、最後を「総論」としている。

序章では、本論文における問題意識と研究の位置づけについて言及している。

民俗学や宗教学を中心に、人生儀礼研究は今日においてもさかんに実施されているにもかかわらず、「死」に関する儀礼への偏りがみられることを指摘している。そして、これまでにほとんど研究対象とされてこなかった、現代の産育や成人期にみられる儀礼の研究の必要性を指摘している。本論文で取り上げられている四つの儀礼にみられる社寺参拝などの宗教的行動に注目することで、日本人の宗教性を取り出す手がかりを得ることの可能性を示唆している。また、「人生儀礼」の再定義の必要性を指摘し、現代の人生儀礼を研究するにあたり、儀礼参加者の心性に注目することを提起している。そして、人生儀礼（通過儀礼）に関するこれまでの研究史の中で、本論文は宗教民俗学の立場に立って、生活の中に溶け込んだ現代人の宗教性を読み取るという視点から、人生儀礼を調査研究したものであることを述べている。

第1章では、主として明治・大正期と現代の安産祈願の実態を明らかにし、両者の比較を行っている。安産祈願のために社寺参拝することや腹帯を五ヶ月目の戌の日に手に入れることへの意識が高いことなど変化していない点が挙げられる一方、特定の神社への参拝の集中、腹帯と社寺参拝とのつながり、帯祝いがみられなくなったことなど変化している点が明らかにされている。安産祈願の現在の実態を把握するために、都内神社八社へのインタビューを実施し、儀礼の執行者側からの意識も含めて現状の把握に努めている。とくに、以前は安産守を得ようと広い地域からの祈願参拝者が集まった新宿区中井の御霊神社の調査事例では、戦前から現在にいたる安産祈願参拝者数を基にし

て、現代の安産祈願の背景について論じている。

第2章では、現在の初宮参りの実態を神社と子育て中の母親たちへのインタビュー調査から明らかにしようとしている。従来初宮参りの意味として、産の忌み明け、神からの承認、社会からの承認、鎮魂・魂鎮めの四点が指摘されてきたが、産の忌み明け、神からの承認、鎮魂・魂鎮めの三点は、現代においても類似した意味が見い出すことができるものの、社会からの承認については現在ではまったくみられないことが明らかにされている。儀礼における靈魂の意味に関しては、儀礼の中心的な問題として考えられてきたが、靈魂と儀礼との関わりが見い出しにくくなったことは、儀礼に大きな変容が生じていることを物語っている。筆者は、現在の初宮参りの意味として、産婦が出産後日常生活に戻る区切りのひとつ、三世代が一堂に会する新しい家族構成を確認する場、神に子どもの将来への加護を祈願する機会の三点を指摘し、これらの背景には育児雑誌などのメディアの影響が大きくみられることを指摘している。

第3章は二部構成で、「第1部 七五三に関する先行研究と意義」、「第2部 儀礼参加者に聞いた現代の七五三」となっている。

第1部では、服飾専門学校の清水学園（東京）が戦前からほぼ毎年実施している七五三服装調査を基に服装の分析を行い、さらに都内神社へのインタビューを実施している。現代の七五三を考える上での特徴と考えられる「着物」と「神社参拝」に注目し、着物の過去から現在までの頒価と現状、現在の七五三の意味について検討を加えている。着物についての考察からは、七五三の特徴といえる着物に対する意味

づけが、子ども観の変化、人生観の変化によって大きく変化していると論じている。神社参拝が大変盛んである一方で、氏神離れや氏子意識の希薄化も進行しており、神社参拝のもつ意味の変化について論じている。

第2部では、七五三に関して、子育て中の母親へのアンケートとインタビューを実施した結果をまとめている。第1部で検討された現代の七五三の意味をさらに検討すると同時に、社寺参拝がさかんである背景、人々の七五三に対する意識を探っている。アンケート、インタビューのいずれの回答からも、子ども写真館が参拝の時期や祝いの形に大きな影響を及ぼしていることが明らかにされているが、母親たちの話からは何よりも社寺参拝を重視する意見が大半を占めていたことが指摘されている。

第4章では、現在三〇代女性に意識の高い厄年を中心に論じている。神社へのインタビューから、都内では二、三〇年ほど前から厄年に関する祈祷件数が急増していることを明らかにしている。この点に関しては、佐野厄よけ大師によるメディアを利用したの宣伝が大きな影響を与えていること、また、東京都神社庁の取り組みである厄年表を境内に貼り出すことによる効果の大きさを明らかにしている。とくに三〇代女性へのインタビューから、体の調子が悪くなりやすい年、節目・変わり目の年、悪いことがふりかかりやすい年としたイメージをもたれていることが明らかにされている。また、厄年に関する著名な寺院（佐野厄よけ大師を含む）へのインタビューから、平成二十四年に新たに女性三十七歳の厄年が創出されたなど、現代の三〇代女性をはじめ

めとした、現代人の厄年に対する積極的な姿勢を明らかにした。

付論では、女性誌における厄年に関する記事から、現代女性の厄年に対する意識がどこに起因しているかその原因を探っている。記事の分析から、女性誌が厄年を扱う際には、健康や社会心理的な説明をとまなうライフサイクルと、不運期を指すことの多い「運」が根拠として用いられていることが明らかにされている。

総論では、第1章から第4章において、安産祈願、初宮参り、七五三、厄年の儀礼において、従来儀礼の行われる際の意味として考えられてきたことが縮小あるいは喪失、形を変えていると論じられている。とくに社会的承認の縮小・喪失、霊魂とのかかわりの希薄化、社寺参拝への画一化の三点について重点的に論じている。

社会的承認については、現在は対象とした四つの儀礼から見いだすことが困難であり、ごく身近な家族を中心とした儀礼、厄年であれば個人のみの場合もある儀礼となっていることを指摘している。関連して、従来は地域社会の中心的な存在であった神（神社）との関係が変化し、信仰や親しみから参拝する訳ではない実情について述べられている。

霊魂との関わりについては、従来霊魂は儀礼の中心に位置していたが、現在は四つの儀礼と霊魂との関わりを見出すことは困難であり、大きく変容した現代人の人生観と合わせて、儀礼のもつ意味自体を見直す必要があると論じている。社寺参拝については、人生儀礼において従来から行われてきたことではあるが、現在のようにどの儀礼においても、社寺参拝に画一化されてきていることは、従来と大きく異なる

る。儀礼参加者による参拝理由は「なんとなく」や「行かないよりいいと思って」といった消極的な回答であるにもかかわらず、大半が社寺参拝を行い、その八割以上が祈祷や祓いを受けている事実がある。アンケートやインタビューの回答からは、人々は人生儀礼をすることの中に、伝統的で普遍的なものを求めている様子を垣間見ることができる。一見して同じように見える儀礼の存続は、大きく形態と意味を変化させていると考えることが可能であり、儀礼の背後にある宗教観や世界観が変化したことを表している。

以上が筆者による現代人の人生儀礼に対するとらえ方と、論文の要旨である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代日本社会において高い割合で実施されている四つの人生儀礼－「安産祈願」「初宮参り」「七五三」「厄年」－の分析を通して、現代における儀礼の意味と変容、背後の宗教観のあり方を明らかにすることを目的としている。また、これらの儀礼がもっぱら神社との関わりが深いことから、現代社会における神社と現代日本人の関係の変化をもテーマとして有している。

本論文が評価できる点は、実証的な調査研究に基づいて、四つの儀礼の現状の把握を試み、それぞれに興味深い事実を明らかにした点にある。以下ごく簡略に要点だけ列挙するが、本論文は従来単なる憶測

であったり知られていなかった事実を資料に基づき客観的に描き出している。

安産祈願では、都内神社八社の授与件数の変化から、氏神神社から特定神社への集中を確認し、背景に雑誌やインターネットといったメディアによる影響を指摘している。初宮参りからは、鎮魂・霊鎮めの意味が失われ、新しい家族構成を確認する機会としての意味が全面に現れている様子が指摘されている。七五三では、従来とは異なった形式での過去や社会とのつながりの確認の機会となっている様子が明らかにされている。近年女性に関心が高くなっている厄年では、予防接種的で表面的な儀礼への変化が述べられている。こうした四つの儀礼の変化と現状に関する調査結果を基にして筆者が結論づけた「社会的承認の縮小・喪失」「霊魂とのかかわりの希薄化」「社寺参拝への画一化」は、十分に首肯できるものである。

また断片的ではあるが、七五三における写真館の重要性や厄年のテレビCMの影響など、儀礼文化に与える消費・情報の影響の大きさにも言及されており、興味深い点である。高度消費化、高度情報化が、伝統的な儀礼文化にどのような影響を与えたのか、あるいは新しい儀礼を創り上げたかに関する研究は、現代日本文化を理解する上できわめて重要であるにもかかわらず、ほとんど未開拓の領域である。この点においても本論文は貢献することができたと考えられる。

以上のような本論文の長所は、筆者の生活視点に支えられているからこそリアリティを持つものである。実際に子育てを経験しながらの研究であり、子育てのネットワークがあったからこそ新たな発見もで

きたと考えられるのであり、女性研究者ならではの研究視点と成果であったといえることができる。

他方で、本論文に問題がなかったわけではない。もっとも大きな問題は、本論文の評価ともなっている調査方法と調査対象についてである。

現状を把握するための客観的な方法として、筆者はアンケート調査や世論調査、インタビューやインターネットのブログ等に依拠している。わずかな事例や情報から推測を重ねて導かれた結論ではなく、客観的な手段によって事実を明らかにしようとする試みは十分に評価できる。しかしながら、筆者が行ったアンケート調査やインタビューは、自らのネットワークを利用したものであり、得られた結果がどこまで客観性を有し、日本人一般に敷衍可能かは必ずしも明確ではない。調査対象とした神社についても同様である。たとえば、七五三に関して実際の調査を行った神社は都内の七社にすぎず、どこまで適応することが可能かは検討が必要である。調査を受け入れる神社がきわめて少数であることを考慮しても、調査結果が限定的であることには留意が必要である。

また、地域的に見ても調査対象は東京に限定されており、一般的に言えば、都市における儀礼研究である。都市における儀礼研究は、都市文化が現代日本の中心的な文化であり、地方へと拡散していくことを考えれば、十分に首肯されることではある。しかしながら実際の調査ではさらに東京での限定的な範囲での調査で、基本的には筆者の居住する地域に隣接する地域である。こうした事実にも十分に留意され

るべきで、いたずらに結論を敷衍する軽率は慎まなければならない。

研究のあり方として、民俗学による研究成果を起点として、現状の調査による分析によって変化を把握しようとすることになるが、そもそも変化の前提となる民俗学による儀礼の状況把握、解釈が正確であるかどうかには疑義がある。つまり、同じ儀礼に関する分析であっても、研究者による見解の相違が見られるのであり、その結果として変化の把握にもぶれが生じることになる。この点は、筆者自身の問題というよりは、現在の儀礼文化を研究しようとする者には必ずつきまとう問題であることも附言しておく。

本論文は、儀礼文化の現状に関する新しい分析結果を複数提示している。それらは現代日本における儀礼文化をはじめ宗教観全般にわたる可能性を秘めたものであると思われる。この領域における調査対象や方法における困難さにもっぱら起因する限定性は存在するものの、女性研究者ならではの意識と調査方法が反映されており、博士課程論文として十分な内容を有するものと考えられる。

平成26年2月15日

主査 國學院大學教授 石井 研 士 ㊞

副査 國學院大學教授 新谷 尚 紀 ㊞

副査 國學院大學教授 武田 秀 章 ㊞